

「死ね」の二文字で
人を殺す死刑執行官は、
声フェチ男に
甘く啼かされる。

体験版

「死ね」

たった二語だった。

石室の床に引き据えられた罪人が痙攣し、瞳孔があらぬ方を向く。もって四秒。またたく間に男は物言わぬ骸になった。

これがこの王国の『死刑』だ。剣も縄も毒杯もない。あるのは、たった一つ。

声。

セラス・ヴォルフリートは死刑執行官だった。

罪状を読み上げ「死ね」と命じれば、罪人は死ぬ。王国にただ一人、声で人を裁く異能を持つ男。顔を知る者はいない。だが声だけは誰もが一度は王城の鐘とともに聞いている。

「——片付けろ」

それだけ言って、セラスは執行の間を出た。

廊下に並ぶ看守どもが一斉に目を伏せて道をあける。誰も執行官を見ない。声で人を殺す男に近づけば呪われる。この国の人間は皆そう信じていた。

結構なことだ、とセラスは思う。

無駄口は叩かない。必要なことしか喋らない。声は人を殺す道具だ。ならば、みだりに使うべきではない。そう己を律して生きてきた。

畏れられるのには慣れている。

それが執行官の日常であり、生涯だった。

その日もいつもと同じはずだった。

仕事を終え、フードを目深にかぶり王都の雑踏に紛れて夕食をとりに出た——その、はずだったのだ。



王都の裏通りに、その飯屋はあった。

安いが味は悪くない。何より常連は執行官の顔も素性も知らない。セラスは隅の席で、無言で串焼きと麦酒を頼んだ。注文は指で示すだけで済ませる。口を開かずに済むなら、それに越したことはなかった。

静かに食っていられれば、それでよかった。

「――よお、兄さん。ひとりで飲んでんの？ さびしくない？」

どさりと、向かいの席に誰かが腰を下ろした。

顔を上げると痩せた青年がへらへら笑っていた。旅装の人好きのする顔。だいぶ酒が回っているらしく頬が赤い。

セラスは答えなかった。目を伏せ串に口をつける。関われば、くなことになる。

「あれー、無視？ つれないなあ。ねえねえ、その串うまい？ 一本ちょうだいよ」

「……………」

「シカトかー。いいねえ、その澄ました感じ。そろられる」

青年はまるで悪びれず、隣へ席を移してきた。距離が近い。酒とどこか甘い香草の匂いがした。

「なあ、名前は？ どっから来たの？ ねえってば」

「……………」

セラスはこめかみに指を当てた。

面倒なやつに絡まれた。

無視していればいずれ諦めるだろう。そう踏ん

でいた。だが青年は一向に離れる気配がなく、あろうことか肩に腕を回してこようとする。

限界だった。

セラスは青年をひたと見据え、声を落とした。

腹の底から、低く鋭い一声を響かせた。

「――離れろ」

店の空気がびくりと震えた。

それは人を竦ませるための声だった。罪人すら黙らせる執行官の声。近くの席の客が数人、なぜか青ざめて肩をすぼめる。店主が思わず皿を取り落としかけた。

これで退くだろう。そう思ったのに。

「……うわ」

青年は退かなかった。

それどころかカッと目を見開いて、まじまじとセラスの顔を覗き込んでくる。

「なにその声。うわ、うわ、なにそれ」

「……なんだ」

「今のもう一回言って。なあ、お願い！ すっげーぞくぞくした！ イイ声だなあ、あんた」

セラスは面食らった。

(……いい声？)

そんなことを言われたのは生まれて初めてだった。

この声は人を殺す声だ。畏れられ遠ざけられ、決して褒められることのない声。誰もが顔を背け耳を塞ぎたがる、忌まわしい異能。

それをこの青年は。

「あんたの声、すんごく好みだ。低くて芯があって。……ああもう、たまんない。もっと聞かせてよ」

うっとりと目を細めて青年は言った。彼は本心から言っているのだ。

心臓が妙な具合に跳ねた。

不覚だった。たった一言声を褒められただけで、長年凍りついていた何かがぐらりと揺らいだ。

「……戯言を」

辛うじてそう突っぱねる。だがセラスの声に、先ほどの冷たさはもうなかった。

「戯言じゃないって。あ、オレはノア。ノア・バルディエル。なあ次の店行こうよ。もっとゆっくりあんたの声、聞きたいな」

「断る」

「即答か！ いいねえ、その切り口上も、たまんない。なあ行こうぜ。おごるから」

「――離せ。人の話を」

「聞いている聞いている」

まるで会話になっていなかった。ノアと名乗った青年はへらへら笑いながら、セラスの腕を掴んで立たせにかかる。ふりほどこうにも酔っているくせに、その手は妙にしぶとかった。

そのままずるずると出口のほうへ引きずられていく。

その背を店主とカウンターの常連客が、生ぬるい目で見送っていた。

「……あちゃー。ノアの坊主に目えつけられたか」

「あの兄さんも気の毒に。ありゃ食われるな。いい声だっただけに」

「声？」

「知らねえのか。ノアは男もイケる口だ。しかもいっぺん気に入った声は絶対逃がさねえ」

無論そんな囁きが背後で交わされていたことなどセラスは知る由もない。気づいたときにはもう夜風の下へ引きずり出されていた。

「よし決まり！ いい店知ってるんだ。あんたにぴったりの」

「待て。私は行くとは」

「まあまあ。減るもんじゃないでしょ？」

夜風がセラスの火照った頬を撫でた。

この時こそ断るべきだった。振り払って官舎に即刻帰るべきだった。

なのにセラスの足はなぜかノアの軽薄な背中についていってしまっていた。

——もっと、聞かせてほしい。

そう言ったノアの飢えた目が頭から離れなかったからだ。



オレの名はノア・バルディエル。表向きは旅の魔導具商だ。

珍しい道具を買い付けて、あちこちの店に卸して回る。

看板も出していない王都外れのこの店は買い付けた魔導具置き場であり、オレの仕事場でもあった。

最もここに並ぶ品の大半はまっとうな魔導具じゃない。夜のお楽しみ専用のオモチャだ。

けどそんなことはわざわざ教えてやらない。

だってその方がずっと面白いから。

「……なんだ、ここは」

フードを脱いだ男が薄暗い店内を見回して、眉を寄せた。

その素顔を見て、オレは危うく声をあげかけた。

（うっわ、すんげー美人）

すっと通った鼻梁に、酷薄そうに引き結ばれた薄い唇。硬質に整いすぎて、いっそ人形めいて見えるくらいだ。ただその目だけが氷みたいに冷えて、他人をちっとも寄せつけない。

静かな美貌だった。こんな美人が飯屋にいた男全員を固まらせる声を出した。落差というやつはどうしてこう、そそるんだろう。

「オレの仕事場。旅で集めた、珍しいのを置ける」

嘘じゃない。半分は。

彼は棚の品をまじまじと検分し始めた。硝子の小瓶。革の帯。くびれた棒。玉を連ねた紐。どれも使い道を知る者が見れば、頬が赤らむ代物ばかりだ。

なのに、この男ときたら。

「……拷問具にしては造りが妙だな。尋問用の検査道具か？」

真顔で、そう呟いた。

オレはこみ上げる笑いを、必死でこらえた。

(拷問具で)

どうやらこの手のものには、とことん縁がないらしい。玉を連ねた紐をつまんでは「装飾用の首飾りか」と首をひねり、革の帯を「拘束具か」と真剣に検分している。……まあ、後者はあながち外れでもないんだけど。

恐ろしく生真面目な男だ。世間ずれというものをしていない。こんな上物が無垢なまま王都の隅に転がっていたなんて。

この澄ました顔の堅物を道具でとろとろに崩したら、いったいどんな声で鳴くんだろう。想像しただけで腹の底がじりじり焦げた。

——逃がすわけがない。

オレは検分に夢中な男の背中に声をかけた。

「なあ、あんた。ひとつ頼まれてくれない？」

鞆から掌ほどの魔導具を取り出す。つまみを捻ると内側の水晶がふわりと光った。

「これ、録音の魔導具。オレ、いい声を集めるのが趣味でさ。……あんたの声、録らせてほしいんだ」

「……録音だと」

男があからさまに眉をひそめた。

「なんのために、そんなことを」

「旅で出会った人の声を聞き返して、にやにやす
るため」

「悪趣味だな」

「そういう人もいる」

けろっと返してやると男は心底うさんくさそう
な目でオレを見た。うん、その仏頂面も悪くな
い。

「ただ喋る声じゃ味気ないんだよなあ。もっとか
う夢中になってるときの素の声が録りたくてさ。
だから——そこの品も好きに試してよ。使い心地
を確かめるついでにさ」

我ながら都合よく端折った誘い文句だった。

男はしばし逡巡していた。だが根が律儀なのだ
ろう。「試す」「確かめる」という言葉に妙に生真
面目な顔で頷いた。

そして迷った末に――その手が棚の一本をそっと取り上げた。

細くつややかな金属の棒だ。こより糸みたいに細く先端はなめらかに丸められている。

根元にはそれ以上奥へ入り込まないための、平たい留め具がある。……こんなに細いものを挿し込む場所なんて、男の体にはひとつきりしかない。

もちろん尿道だ。

(――マジかよ)

オレは思わず舌なめずりした。

数ある品の中から、よりもよって一番"効く"やつを引き当てるとは。

「これはどんな風に使うのだ？」

まるで見当がつかない、という顔で男が訊いてくる。

「んー、それはね。挿れて、じっくり慣らすと
……とっておきの声が出る、っていう凄いやつ」

「いれる……？　口にか？」

危うく噴き出すところだった。ずいぶんと、い
じらしい見間違いだ。

「まあ、そんなとこ。……で、どう？　それ試す
の付き合ってよ」

男の眉がぴくりと動いた。それまでのどこか投げ
やりな態度が嘘のように消えた。

「録音と言ったか？」

「うん」

「断る」

今度は即答だった。飯屋のときとは声の温度が
まるで違う。刃みたいに冷たい。

「私は声を録らせる気はない。……それだけ
はな」

へえ、とオレは内心で唸った。よっぽど自分の声に神経を尖らせて生きているらしい。

――ますます、欲しい。

「なんで？ オレ、外に漏らしたりしないよ？」

「そういう問題ではない」

きびすを返しかけた背中へ、ノアはとっておきの一言を投げた。

「ふうん。飯屋でオレがあんたの声、褒めた時嬉しそうだったのに？」

男の足が止まった。

凶星だ。

飯屋で見た瞬間から分かった。こいつはきっと生まれてこのかた一度も自分の声を誰かに褒められた事がない。

「……嘘だ」

彼の声は震えていた。あと、もう一押し。

「あんたが嘘だと思い込みただけだろ。……こんな声、誰かに褒められるはずがないって。違
う？」

背を向けたまま、男は長いこと黙っていた。

やがて絞り出すように低く言う。

「……試すのは道具だけだ。声は出さん」

(は?)

「たかが道具の一つや二つで、取り乱すとでも
思ったか? ……一言も漏らさず試して返してや
る。それで文句はあるまい」

オレは危うく嘔き出しかけた。

黙ったまま、ときたか。このいちばん"効く"や
つを尿道に挿れておいてとは。

(――上等だ)

どこまでも生真面目で身の程知らずなその自信
が、たまらなく可愛かった。

「じゃあ——賭けにしょっか」

「賭けだと？」

「あんたが最後まで声ひとつ漏らさずにいられたら、あんたの勝ち。オレは二度と声をせがまない。……でももし一度でも声が漏れたら」

オレはにっこり笑ってやった。

「その分たっぷり録らせてもらう」

男はフン、と鼻を鳴らした。勝ちを露ほども疑っていない顔で。

「いいだろう。乗ってやる」

(かかった)

極上の獲物がたった今、自分からいちばん抜け出せない罠に手を伸ばしたんだから。



「賭けには乗ると言ったが、こんなやり方は聞いていないぞ！」

気づけばセラスは寝台に仰向けにされていた。

両手首にはいつのまにか革のベルトが巻かれている。頭上でひとまとめに拘束され、いくら引いてもびくともしない。上着の前ははだけられ、薄闇に白い胸がさらされていた。

ノアは意に介さず、枕元に録音の魔導具を置いてつまみを捻った。水晶がふわりと灯る。

「声は出したくなかったときでいいからな」

悠然と言ってのける。自分の勝利を疑っていないらしい。なんとも憎たらしい。

「……はっ、誰が出すものか」

「うん、その意気だ。せいぜい我慢してくれよ」

ノアが仰向けのセラスの腰へ、ゆったりと馬乗りになった。もう逃げ場はない。

指先がはだけた上着を、さらに左右へと割る。とろりと冷たいものが胸に落ちた。香油だ。甘ったるい匂いが立ちのぼり、垂れた雫が肌をつたって鎖骨のくぼみにたまる。

「な……っ」

ひやりとした感触に、危うく声が出かけた。セラスは奥歯を噛みしめる。

（この程度で乱されてたまるか）

だがノアはその顔を覗き込み、楽しげに目を細めた。

「へえ。あんたの乳首……面白い形してるな」

指の腹が香油に濡れた胸の突起を、つ、と撫でた。

そこは他の男のように尖ってはいない。わずかに窪み、乳輪の奥へ慎ましく引っ込んでいた。生まれてこのかた、誰の目にも触れさせたことのない場所だ。

「陥没乳首なんだ。かわいいー。なあ、自分でいじった経験ある？」

「――貴様には関わりのないことだ」

「えー、いけず。まあ、あんたの身体に訊くからいいけど」

ノアの指が窪んだ乳首の縁を、香油ごとくくると撫で始めた。

くち、くち。

「……っ」

甘い痺れが胸の奥からじわりと滲む。セラスは息を止めた。声さえ出さなければいい。ただ、それだけのことだ。

だがノアの指は執拗だった。引っ込んだ突起の周りを飽きもせず撫で、押し、こねる。焦らすように、けれど確実に、その一点へ神経を集めていく。

「かたいなあ。奥で縮こまってる。……そんなに恥ずかしがり屋なんだ？」

「だ、まれ」

「お。今の掠れた声、よかった。もっと聞かせてよ」

「——ッ」

しまった、と思ったときには遅かった。ほんのわずか、喉が鳴っていた。セラスは唇を引き結び、必死に息を殺す。

ノアが笑ったので、今度は顔を伏せた。

しかし熱い舌が香油まみれの乳首に這う。

ちゅ、く♡

続きは製品版で

体験版をお読みいただき、
ありがとうございました。

製品版は全59ページです。

この体験版には本文の「24ページ」までを
収録しています